不実の木

二八十七九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不実の木

【Nコード】
N4639G

【作者名】
二八十七九

【あらすじ】
洋介は恵のことがすき。すきですきでたまらないのに、恵がどう思っているのかさっぱりわからない。ふざけているのか、はぐらかしているのか、天然なのか、洋介の思いは肩透かしをくらうばかり。

【イチョウ】 scene1：わからないこと

イチョウの木には雄と雌がある。
どちらか一方だけでは実らない。

「あんた、オレが好きだって知ってんだろ？」
「それって遠まわしな告白？」
恵はカップアイスを食べていた。洋介が買ってきた抹茶のアイス。
恵の部屋を訪れるとき、必ずカップアイスを二つ買ってくる。
我ながら芸がないと思いつつ、恵が嬉しそうな顔をするのでアイスを買ってしまう。

毎日、家に行ったらウザがられるかなとか、電話したら気持ち悪がられるかなとか考えて、家に行くのは最低二日、間を空けてみたり、電話は一日置いてみたりしている。
電話ができないときはメールを送る。毎日、数通のメールのやり取りをしていた。
恵は嫌な顔せず、家に上げてくれるし、電話にも出てくれる。メ

ールの返信だって、短いけどちゃんとくる。

嫌な顔はしない。
でも。
嬉しそうな顔もしない。

恵が何を考えているのか、まったくわからない。

「オレ、あんたとヤりてーんだけど」
「露骨だね」

恵は手を止めて、洋介を見た。
普段、人の目を見ることなんてないくせに、こんなときだけは見る。
黒い目が心の底を覗き込むように真っ直ぐに向けられていた。

恵の目を見ていると、引き寄せられていく。
アイスなんて食べている場合じゃなくなる。
手を伸ばして触れたい。
身を乗り出そうとすると、恵が目を逸らした。

視線の呪縛から解かれたように我に返って、その場から動けなかった。

「好きな人としかヤらない主義だから」
「遠まわしにフってんの？」
「お互い様じゃない？」

恵はアイスをプラスチックスプーンですくって口に入れた。
いつも最後のほうは溶けていて、液体になってしまっている。そ

れでも、恵はトロトロとアイスを食べていた。
洋介はため息をつきながら、頭をかいた。
どうすればいいのか、ずっとわからない。
恵との会話はいつも噛みあわない。的がずれていて、いつも話が逸れてしまう。それが意図的になのか、天然なのかもよくわからなかった。
「あんた、オレを部屋に上げる意味はわかってんの？」
つい責めるように言ってしまう。恵が悪くないのはわかっているけど、イライラしてくる。
「押し倒されても文句は言えないよ」
「そーだねー」
最後の一口を運んで、恵は笑いながら言った。
「ゴーカンとかされても、自分のこと好きなヤツと二人きりになったほうが悪いとか言われるかもね」
「あんた、おちょくってんのか」
「なんか、怒ってる？」
首を傾げるようにして、洋介の顔を見た。
洋介は目を逸らす。
「オレ、あんたの考えていること、全然、わかんねー」
「よく言われるよ」

恵は空のカップを押しやって、テーブルに頭を乗せた。そこから、洋介の顔を見ている。

「何考えてるのとか、訳がわからないとか」
「当たり前だろ。意味がわかっていて、部屋に上げるなんておかしいんだよ」
「今度からアイスだけ貰って追い返すよ」
「なんでそうなるんだよっ」
「おかしくないほうがいいかと思って」
「おかしくないあんたなんて、おかしいだろ」
「なにそれ」

洋介は自分の言った言葉に顔を赤らめた。自分で何を言っているのか、よくわからない。
恵は目を細めて笑っていた。声を上げて笑ったりはしない。いつも微笑するか澄ましているかのどちらかだ。

アイスを貰ったときだけ、嬉しそうな顔をする。

「とにかく！」

洋介は恥ずかしさを振り払うように立ち上がった。

恵は小さく口を開けて、洋介を見上げている。
黒い瞳が真っ直ぐに向けられていた。
見返しても、感情を読み取ることはできない。

洋介は恵の横に膝をついて、腕を掴んだ。

「オレは本気で、あんたが好きなんだ」

「それで？」
「それでって……」
「どうしたいわけ？」
「どうしたいって……」
そんなこと、訊かれるとは思ってもみなかった。
告白したら返事を貰う。ＯＫなら付き合うし、ＮＯならさようならだ。
「あんたの気持ちが知りたい」
「またアイスを持ってきてくれればいいなと思ってる」
やっぱり、恵の考えていることはよくわからない。

【イチョウ】　scene2：決めたこと

イチョウの木には雄と雌がある。
花粉を飛ばさないことには実らない。

「あんた、オレのこと好きだよね」

いつものように洋介が買ってきたカップアイスを食べていた恵の手が止まった。
目だけを向けて、数秒。
じっと見た後、ため息をついて、プラスチックスプーンでアイスをほぐす。

「なんだよ、そのリアクションは」
「うぬぼれるほどの顔だったたのかと思って、見てみた」
「人のこといえる顔かよ」
「この顔、嫌い？」

洋介は恵が好きだ。
そのことは恵も知っている。
それなのに、こんな質問、卑怯だ。

「嫌いなわけないだろ」
「へんな趣味」
「人の趣味に文句つけんな」
「どうせなら木曜のドラマに出てるコみたいな顔がいいなあ」

恵はアイスをほぐしながら、ドラマの出演者の名前を挙げた。まるで、他人の話をしているような口振りだ。はぐらかしているのか、自然にそうなのかよくわからない。

洋介は毎日、メールを送っていた。短いけれど、ちゃんと返信はある。
一日置きに電話をしていた。かかってくることはない。
洋介は恵の部屋に通っている。恵が洋介の部屋に来たことはない。

いつも一方的だった。
洋介が近づかない限り、恵との距離は縮まらない。
洋介が立ち止まってしまえば、距離は変わらない。
たとえ、洋介が去ろうとしても、恵はきっと引き止めたりしないのだ。

「あんた、残酷な」

独り言のようにつぶやいた。
恵はプラスチックのスプーンをくわえたまま、洋介を一瞥しただけで何もいわなかった。

「今度は何を思ったんだよ」
「M」
「は？」

「残酷が好きな人はM」
「あーそー、そーゆー話ね」

投げやりに答えて、自分のアイスを口に運んだ。
全然、会話がかみ合ってない。
なんでこんなに話が合わないのに好きなのか。自分がわからなくなる。

だいたい、タイプじゃない。
好きなタイプは明るくて活発な感じの女の子だ。
今までだって、そういう女の子と付き合ってきた。

恵では何もかも全てが違う。
インドアだし、発言はネガティブだし、洋介が黙ってしまうと会話が全くない状態で時間が過ぎていく。

「で、ホントのとこはどうなの？」
「何が？」
「オレのこと、好きだろ？」
「犬がさ……」
「ごまかすなよ」
「うん、だからね」

恵はアイスを食べる手を止めて、洋介のほうを見た。
丸い黒目が向けられると、洋介は落ち着かなくなる。
吸い寄せられるような気になって、手を伸ばしたくなった。

「犬がたまに遊びに来る人にエサを貰ってなつくじゃない？それって好き？」
「つまり、オレはエサをくれるひとなわけ？」

「アイスくれる人」
「あんたねっ！」

気付いたときには恵の腕を掴んでいた。

「痛いよ」
「あっ、ごめん」

慌てて手を放した。
本当はそんな風に触れたかったわけじゃない。優しく愛しむように触れたかった。

「あんたは犬じゃないだろ。ちゃんと考えろよ」
「考えたら、恋に堕ちないよ」
「は？」
「なんでこんなやつ好きなんだろうって思うことない？」

あるけど、本人を目の前にしては言えない。

「恋って脊髄反射みたいなもんだと思ってる」

恵はうつむいて、ため息をついた。

「考えて好きか嫌いかなんてわからないよ。もし、好きだとしても、それは洋介の好きとは違うと思う」
「それが考えない理由かよ」
「考えて欲しいなら、答えを出すよ」

恵はうつむいたままだ。
洋介は心の中で恵の言葉を反芻した。

（考えたら恋に堕ちない。考えて欲しいなら答えを出す）
考えたら恋に堕ちない。
堕ちないのに答えが出る。
恋をしない。
考えなかったら、恋に堕ちる可能性があるのだろうか。
洋介は首を振った。
「やっぱ、いい。答えはいらない」
「うん」
恵はうつむいたまま、ほっとしたように息を吐いた。
「オレ、これから毎日来る」
「えっ？」
恵は顔を上げて、怪訝そうな顔をした。
「そんで、あんたに毎日好きだっていう」
「それはちょっと、やめてほしい」
「やる」
毎日、通って、毎日、言う。
言い続ければ、知らず知らずに暗示にかかるかもしれない。
サブリミナル効果みたいにいつの間にか、好きになるかもしれない。
いないと寂しい存在になるかもしれない。

仮定だけど、可能性はゼロじゃない。
どうせ一方通行なら、立ち止まっていても仕方がない。
できることをできるだけやる。

幸い、恵は困った顔をしているが、嫌がっている様子はない。

【イチョウ】　scene3：脊髄反射

イチョウの木には雄と雌がある。
雌が待っていようといまいと、雄は花粉を飛ばす。

髪に触りたくなることがある。無造作に置かれた指先に触れてみたいときがある。
手を伸ばせば届く距離なのに、その願いは叶わない。
ふたりきりの部屋の中で、衝動を紛らわせるようにうつむく。目を合わせると、春情に気付かれるような気がした。
洋介は女の子と手をつないだり、肩に腕をまわしたりすることはなんでもない。
初めてあったコとキスをして、ホテルで抱き合うことは単純に気持ちがいい。
特別な意味なんてなかった。

いつの頃からか、キスをしながら考えている。
アイツ、キスをするとき目を瞑るのかな。
愛撫しながら、考えている。

アイツ、感じたりするのかな。

アイツ——恵のことを考えながら、他の誰かを抱いていた。
気付くと、他の誰かの中に恵を見つけようとしている。

いつの間にか、頭と下半身は恵のことでパンパンになっていた。
何をしていても、恵のことを思わずにはいられない。

電車の小さな液晶から流れる今日の運勢を見れば、恵の運勢をチェックしている。
似たような背格好の人を見れば、目で追っていた。

パンパンになった気持ちを抑えきれずに、恵に会いに行く。
恵の顔を見ると、どこからか空気が抜けていって、パンパンだったところがしぼんでしまう。

言いたかったことも、したかったこともできない。
前もってアレコレ考えてきたことは、何の役にも立たなかった。

平生のフリをする。
冷静さを装って、手土産のアイスを食べた。

食べながら、話しかける。
友達のこと、音楽のこと、映画のこと。
話題はなんでもよかった。

洋介が口をつぐむと部屋の中は静まり返る。
恵は黙々とアイスを食べた。
空回りしている自分を感じながら、喋り続ける。

恵の好きなこと、嫌いなこと、苦手なものを知りたかった。
些細なことでもいいから、恵と共通するものが欲しかった。
恵は最初から変わらない態度だ。

話をききながら、アイスを食べている。
時々、視線を向けて微笑んだり、的外れな答えを返す。

アイスを食べ終えると、ふらりと立ち上がって台所へ向かった。
ミルでガリガリ豆を挽く。
その間、手持ちぶさたでありながら、恵を見ているのが好きだ。

恵は慣れた手つきで、コーヒーを入れる。
両手にマグカップを持って戻ってきた。

色違いのカップを見るたびに、洋介は気恥ずかしい気持ちになる。
五色セットのマグカップだと知ってはいるのだけれど。

手渡されたマグカップを受け取るとき、指先が触れた。身体中の神経が指先に集中する。
恵は気に留める様子もなく、いつもの場所に座った。

洋介は平気な顔を作りながら、コーヒーカップを口に運んだ。
指先が痺れたような感覚。
とてもじゃないが、恵の顔を見られない。

指先からコーヒーに意識を集中させようとしていると、恵がつぶやいた。

「アホ……」
「は？」

「アフォ……」

見透かされているような気がした。

「なんていうんだっけ、アイスにエスプレッソをかけるの」
「あ、アフォガードだろ」
「そっか」

恵は笑って、カップを口に運んだ。何も気にしていない様子だった。

自分だけ意識して、バカみたいだ。指先が触れただけで、意識してしまうなんて――恥ずかしい。

恵はそんなこと気にしていない。

洋介が思っていることに気付いていても、きっと知らないフリをする。

恵の黒い瞳が正面から洋介を見据えるとき、全てを見透かされている気がする。

わかっていて、知らないフリをするのだ。

冷静さを装っていても、鼓動は早くなる。
平静な態度をとっても、浮かれている。
知っているくせに恵は何も言わない。

まるで、洋介に興味がないかのように見て見ぬフリをする。

いつまでも、隠していられなかった。
冷静なつもりでも、冷静ではいられない。
気付いたときには、責めるように言っていた。

「あんた、オレが好きだって知ってんだろ」

【イチョウ】　scene4：嫌いじゃない

イチョウの木には雄と雌がある。
受粉しなければ実らない。

「あんた、オレのことが好きなんだよ」
洋介の言葉に、「ふうん」とだけ答えて、恵はアイスを口に運んだ。まるで、自分には関係のないといった反応だ。
洋介はアイスを食べ終え、コタツで足を伸ばした。
両手を後ろについて、半身を伸ばすような格好で、恵を見ている。
「他に言うことはないのかよ」
「んー……」
ちょっと考えるような顔をして、恵はプラスチックスプーンを置き、洋介の前のコタツ布団を持ち上げた。
「なんだよ」
「穴に入りたい気分かと思って」
「別に恥ずかしくねえっ」

洋介は恵の手ごと布団を押さえた。恵は押さえられた自分の手を見ている。

「あんた、なんだかんだ言いながら、オレのこと受け入れてるだろ。それは好きだからだよ」

毎日、洋介は恵に部屋に来る。喜ぶ顔見たさにアイスを土産に持って。

毎日のことなのに恵はアイスを見ると嬉しそうな顔をした。困るといいながら、洋介が訪ねてくると、部屋に上げる。

一度も断らない。

半同棲のような生活をして、洋介は気付いた。

恵は自分の感情に気付くのが遅い。

食器棚には似たような柄の皿が多い。好みで買っていながら、本人はそういう系統が好きだということを指摘されるまで気付かなかった。

悲しい物語のＤＶＤを見ても、すぐに泣いたりはしない。しばらくの間、沈んでいるだけだ。

恵自身の話をしていても、どこかなおざりなところがある。

洋介は続けて言い募った。

「嫌いなやつが毎日来たら苦痛だろ。あんた、オレが来るの嫌か？嫌じゃないだろ」

「そうだね」

澄ました顔をして、頷いた。

本心なのか、おざなりに返事をしているのかよくわからない。
恵は押さえられた右手をそのままに、左手でプラスチックスプーンを逆さに持った。
勢いよく自分の右手の上に振り下ろす。
恵の右手には洋介の左手が重ねられていた。逃げる間もなく、スプーンの柄が刺さる。

「イッ……」

痛みを散らすように手を振った。
スプーンの柄が刺さったところが黒ずんでいる。じんわりと血が滲んだ。

「何するんだよ」
「絆創膏いる？　コレンジャーか、プティクアか、アパンマンのやつならあるよ」
「いんねえっ」

恨めしそうに恵を見て、滲んだ血を舐めた。
悪びれた様子もなく、「ごめんね」と恵は謝った。

「意味わかんねえことすんな」
「ためらうかと思って」
「は？」

手の甲がじんじんして、熱を帯びた。
恵は右手にスプーンを持ち替えて、アイスを口に運んだ。
洋介の顔は見ない。

「好きな人を傷つける行為って、ためらうでしょう？」
「全然、ためらわなかったろ」
「うん」

眉宇を寄せて、頷いた。

「もう少しマシな試し方しろよ」

血は止まったけれど、じんじんと痛む。小さな傷なのに、痛感覚がそこに集中しているみたいだった。
胸の痛みさえ、手の甲にあるようだ。

恵はため息をつくように言った。

「洋介のことは嫌いじゃない」
「それは好きってことなんだよ」

恵は小さく首を振る。

「好きでもない」
「オレはまだエサをくれる人なのか」

いつか、恵がたとえて言ったことがある。

「犬がたまに遊びに来る人にエサを貰ってなつくのは、好きだから？」

こうも言った。

「考えたら、恋に堕ちないよ」

頭で考えたら、恋には堕ちない。堕ちないままに答えを求めても、先にあるのは別れだけだ。

恵に考えさせてはいけない。追い詰めたら、考えてしまう。
毎日、恵の部屋に通っても、縮まらない距離感。
焦っていた。
時間はあるというのに、ずっと変わらないんじゃないかという不安がつきまとった。

「ごめんね」

伏し目がちに恵が謝った。
嫌な言葉だ。
まるで、別れを告げられているような気になる。

「いや、オレこそ悪かった」

恵の気持ちは恵のものだ。
たとえ、ものすごく鈍くて、気付くのがものすごく遅かったとしても、恵の気持ちが動くのを待つしかなかった。
待つ間、できる限りのことはやるけれど。

【さいのめ】　ｓｃｅｎｅ５：運試し

賽は投げられた。
あとは野となれ、山となれ。

「とりあえず、付き合ってみるってのは、どう？」
例によって、コタツに入ってアイスを食べている恵に、洋介が問いかけた。
恵は洋介を一瞥しただけで、アイスを食べる手を止めなかった。

「黙殺する気かよ」
「好きでもないのに付き合うのっておかしくない？」
「初めから両思いのほうが珍しいだろ」
そうだねと、気のない様子で、恵はアイスを口に運んだ。
「付き合ってみれば、互いのことがわかってきて、だんだん好きになっていくもんだろ」
「前向きな考え方だ」
「グダグダ考えたって状況は変わらないからな」

そうだねと、恵は他人事のような相槌を打つ。
たいてい、恵は自身の話でも、他人のことのような返事をする。
そういう態度に洋介も慣れつつあった。

「じゃぁ、今日から付き合うってことで」
「ヤダ」

即答だった。

「なんでだよ」
「付き合ったら、襲われるじゃないか」
「な、なんでそうなるんだよ」
「じゃあ、しないわけ？」
「襲いはしないだろ」

ふうんと、恵は目を細くして、洋介を見た。
悪いことなどしていないのに、後ろめたくなって洋介は目を逸らした。
下に心があるせいだろう。

「だ、だいたい、話が飛躍しすぎなんだよ。普通に付き合ったって、そういう関係になるまでには多少時間があるだろ」
「そうなの？」
「あんた、今までどんなやつと付き合ってきたんだよ」
「アルバム、見る？」
「いや、いい」

腰を浮かせた恵は、薄く笑みを見せた。
何を思っての笑みなのか、洋介にはわからない。

「とにかく、いきなり襲ったりはしない。お互いにそういう気になったら、すればいいんだよ」
「付き合うって何をするわけ？」
恵はプラスチックスプーンでカップの中をかき混ぜている。アイスが半液状になっていた。
「普通に遊びに行って、話をしたり、ご飯食べたりすればいいだろ」
「今と何が違うの？」
溶けかけたアイスを恵は口にそっと運んだ。スプーンからタラタラと白い液体がテーブルに落ちた。
そばにあったティッシュをとって、洋介は恵がこぼしたアイスを拭いた。
「付き合ってるかいないかで、意識が違うだろ」
「呪縛がほしいんだ」
「じゅ……なんだそれ」
「呪縛。洋介は縛りたいんだ」
ああ、またダだと、洋介は思う。恵の言っていることがわからない。気があるときはわかるように説明してくれるが、ないときは謎のままだ。
「トモダチよりコイビトのほうが親密な感じがするでしょ。コイビトだから、他の人と違う距離にいるんだよっていう制約」
「そぅ……いうことかな」
同調してみたものの、洋介はそんな風には恵の言っていることがいまひとつわからない。

単純に好きだから付き合いたいと思っただけだ。

「意識的な関係を変えることで実際の関係を変えたいんでしょう？」

「うん、まぁ」

「都合よく変わるとは限らないけどね」

恵は食べかけのアイスを押しやって、テーブルにチラシを広げて裏返した。裏が白いチラシだ。

縦線を平行に四本書いた。縦線の下にマルとバツを交互に書いて、その部分を折り曲げて隠す。縦線の間に横線を書いていき、最後に下の部分をもう一度折り込んだ。折った部分を手で押さえて、恵はチラシを洋介のほうに向けた。

「どこがいい？」

「なんだよ、これ」

「あみだくじ、知らない？」

「なんのために？」

「運試し」

質問の仕方が悪かった。

「マルだとどうなるんだよ」

付き合うと、恵はあっさり言った。まるで、オマケにガムでもくれるみたいな軽い調子だった。

「マジで？」

「選んで」

本気らしい。

「こんなことで決めていいのかよ」
「悩んでも決めるときは一瞬だから、同じことだよ」
どうぜ同じなら、考えて決めて欲しかったと洋介は思う。
方法は恵が提示しているが、結果は洋介次第ということになる。
「確率は二分の一。告白するのと同じだよ」
確率が同じでも、気分が違う。
結局、右から二番目の線を選んだ。
逡巡している洋介を上目遣いに恵が見ている。
滅多に見ない顔だ。どうせなら、違うときにみたかった。
恵は口端に笑みを見せて、線をなぞっていく。楽しそうな顔だ。
折り曲げた部分を広げようとした恵の手を、洋介は上から押さえた。
「ちょっと、たんま」
「何？」
「やっぱり、こういう決め方はよくないんじゃないかと……」
「じゃんけんにする？」
「いや、そうじゃなくって……」
恵は洋介の手に手を重ねた。
「運試しに度胸試し。口で言っても、あみだでも同じ」
洋介の手をそっとのける。

紙を広げて、結果を見ると、恵は肩をすくめて、苦笑した。

洋介には運がない。

【さいのめ】　scene6：試みる

賽は投げられた。
指し示す目は、神のいたずら。

「マジで興味ねぇのかよ」

洋介はひとり、つぶやいた。

携帯電話のサブディスプレイを覗き込む。着信もメールの受信もない。それでも、携帯を開いてメインディスプレイで着信とメールの受信を確認する。ないことがわかると、携帯を折りたたんだ。
一日に何度もこの動作を繰り返している。ほとんど無意識に携帯を手に取っていた。

恵の部屋に通うのを止めて、三日目。恵のほうから音沙汰はない。洋介も連絡していない。

最近、付き合いが悪いぞと、友人が冗談めかして言った。それで、実は好きな人のところに通っているんだと告白した。
それまで、誰かに恵のことを話したことがなかったので、話すだけでも気が楽になった。自分で思うよりも思いつめていたらしい。

押してもダメなら引いてみろ。
友人のありきたりな助言を実行している。
一日目は不思議に思い、二日目には気になり始め、三日目には心配になる。
友人の言葉を鵜呑みにしたわけではなかったが、会わないことで何かしらの変化があるかもしれないと思った。
毎日会っていると気付かないこと。洋介が来ないとつまらないとか寂しいとか、思ってくれればいいと思った。ほとんど、願望だった。

恵に会っていない時間。洋介は携帯電話ばかり気にしている。
時間を持て余していた。恵に出会う前、どんな風に過ごしていたのかも思い出せない。ただ、空虚に時が過ぎていった。

時間が経つにつれ、洋介は不安になった。家族や友達が急に連絡を絶てば、気にかけるだろう。心配して、連絡を試みるだろう。
しかし、何の興味もない相手だったら——？

いつか、恵がふたりの関係を犬とエサを与える人に例えたことがある。
恵は犬で、エサを与えてくれる人になついている。
洋介はエサを与える人だ。
犬はエサを与えてくれる人が来なくなったら、寂しく思うだろうか。来てほしいと思うだろうか。
それ以前にエサなど与えていなかった。洋介が手土産にしているのは、せいぜい二・三百円のアイスだ。手に入れようと思えば、恵

は自分で手に入れられるし、アイスは主食ではない。
三度の食事は自分でできるのだから、あってもなくても困らない。
一日目に今日は来ないなと思い、二日目にどうしたのだろうと思い、三日目に忘れられる。
そんなこともありうるのだ。
携帯電話を手にとって、サブディスプレイを覗き込む。着信もメールの受信もない。携帯を開いて、メインディスプレイから着信履歴を確認し、メールの受信箱を覗く。さらにセンターにも問い合わせてみる。
恵からの連絡はない。
恵がどう出るかで、気持ちが知れるはずだ。このまま、連絡がなければ、恵にとって洋介はいてもいなくても同じということなのだろう。
折りたたみの携帯電話を開けたり閉じたりしながら、何をするともなく時を過ごしている。
考えないようにしようとしても、恵のことばかり考えてしまう。連絡をしないと決めているのに、リダイヤルの履歴を見ている。過去に受信したメールを見ている。
ため息がもれた。
根競べにしたって、分が悪い。恵になんとも思われていない可能性は大きいのだから、こんなことに意味さえないような気がしてく

る。

恵の気を引こうとしてはじめたことなのに、気付いたら自分がどれほど恵を好きかということを思い知らされている。

何をするにしても、恵のことばかり考えていた。考えないようにと思うほど、恵のことを考えている。意識を逸らそうとして、集中していた。

終始落ち着かず、苛立ちながら、一週間を我慢した。それ以上は我慢し切れなかった。

いつのも手土産を持って洋介は恵の部屋を訪れた。

チャイムを鳴らす。返事がない。少し待って、もう一度、チャイムを鳴らしてみた。出てくる気配がない。

嫌な感じがした。

寝ているのかもしれないと思い、玄関の前で電話をかけてみる。電波の届かないところにいるか電源が切れているというアナウンスが流れた。

もう一週間も会っていない。

興味がない相手だったら、突然来なくなっても、気にしないだろう。

漠然と思っていたことが、現実になったような気がした。

血の気が引いていく。どうしたらいいのか、わからなかった。

洋介は呆然と立ち尽くした。

【さいのめ】　scene7：世界

賽は投げられた。
どこに投げて、どこへ行ったのか。

世界はひとつしかなくても、個の世界は個の数だけある。
恵と洋介の世界は、恵の部屋にあって、それはふたりの世界が交わるとき。
洋介は洋介の生活の場があって、それは洋介の世界。
恵にも恵の生活の場があって、それは恵の世界なのだけれど、生活の場というのが恵の部屋だから、洋介は錯覚した。

恵の世界はあの部屋にあると。

洋介が知る恵の世界は狭い。近くのコンビニへ行くとか、商店で買い物をするとか、そのくらいのことだ。話の端々から得た情報で社会人であると思っていても、何の仕事をしているのかまでは知らない。

子供の頃の話をしても、家族が何人いて、今どこで何をしているのかは知らない。
洋介にとって、恵の部屋で会う恵が全てだった。

恵と会わなくなって一週間。
限界を超えて会いに来たというのに、恵はいない。
電話は通じないし、メールの返信は来ない。会いたくても、会えない。

どこへ行けば会えるのか、見当もつかなかった。

わからないので、洋介は恵の部屋に通った。恵の部屋の前で電話をかけて、チャイムを押してみる。恵は出ない。

しばらく待って、落胆したまま帰った。

一週間と二日目――ようやく、恵に会うことができた。

恵はいつもとかわりなく、澄ました顔で玄関を開き、嬉しそうな顔をしてカップアイスを受け取った。

久しぶりに入った部屋は、少しも変わりなかった。狭い玄関を上がって、廊下だか台所だかわからないスペースを通る。部屋の中央にはコタツがある。コタツの上に恵のカップと色違いのカップが置かれていた。右側にベッドがある。黄緑色の掛け布団が壁際に追いやられていた。

恵は定位置のベッドを背もたれにして座れる場所に、洋介は窓を背にする位置でコタツに入った。
コタツに入ると、恵はビニール袋からカップアイスを二つとりだす。バニラ味を自分の前に、チョコレート味を洋介の前に置いた。
まるで、昨日も会ったような様子でいる恵に洋介は苛立った。

「あんた、オレに言うことないのかよ」
責めるような強い口調になっていた。
恵はアイスのフタをはずす手を止めて、洋介の前に置かれたチョコレート味のアイスに眼をやった。
「バニラがよかった？」
「そんなこと言ってんじゃねぇ」
洋介はアイスのフタを開けた。
一週間と一日。
洋介のことを気にかけていた素振りのひとつもしてくれればよかった。洋介に連絡をしなかった理由を、恵が言い訳をしてくれればいいと思っていた。
恵はプラスチックスプーンをくわえたまま、アイスをじっと見ている。
一応、洋介が求めている言葉を探しているのだ。探しながら、自分の欲求を押さえ込んでいる。
アイスが食べたい。でも、洋介が何か言ってほしがっている。それが思いつくまでは食べられない。でも、食べたい。でも、洋介が——。
頭の中はこの繰り返しだ。
洋介が知ったら、いっそう憤然とすることだろう。

「誰か来たのかよ」
「ふえ？」
恵の口からプラスチックスプーンが落ちた。
洋介はテーブルに置かれた青いマグカップをあごで差した。恵のカップとは色違いだ。コーヒーが半分くらい入っている。
恵はプラスチックスプーンを拾いながら、あっさりと答えた。
「うん、さっきまで来てた」
「誰？」
「父親」
恵の言葉に、洋介はうつむいた。恵の澄ました顔を見ていられない。
洋介は目を伏した。脳裏に浮かぶ背広を着たサラリーマン風の男。年は三十代半ばくらいで、きりりとした眉の下にフチのないメガネがあった。パッと見、知性的で仕事ができそうな感じがする。
この男は、恵の部屋から出てきた。
廊下は静閑としているので、低い声がよく通った。
「また、様子を見に来るよ」
恵の声はきこえなかった。
それまで、恵の部屋を誰かが訪れるなんていうことは考えもしなかった。自分だけだと思っていたのだ。

洋介が部屋にいるとき、誰かがチャイムを鳴らしても、それはセールスマンだったり、宅配業者だったりした。
恵の知り合いではなかったのだ。
洋介は身体中の血管がつまっているような気がした。どこも流れが滞って、身体が痺れているような気がする。
「ウソ、つくなよ」
ため息をつくようにつぶやいた。
「ウソなんてついてないよ」
「あんたの父親はすげえ若作りなわけ？　それとも、十代で父親になったのか？」
あの男はせいぜい三十代後半だ。恵の父親にしては、若すぎる。
恵はアイスのフタを閉めて、プラスチックスプーンをテーブルに置いた。ベッドに背中を預けて、洋介を見る。
「回りくどい言い方していたらわからないよ」
「あんたとどんな関係？」
父親、と恵は短く答えた。
「なんで、ごまかすんだよ」
「ごまかしてない」
「あんな若いわけないだろ」
「会ったんだ？」

「来るときに」
「再婚相手だよ、母親の。だから、血のつながりはない」
あっさりと恵は言った。
母親よりも恵のほうが年は近いので、外見からすれば、到底、父親には見えない。戸籍上は親子でも、実際には友達みたいな関係だ。
それをきいても、洋介の気持ちはすっきりと晴れなかった。
恵には恵の世界がある。恵の家族も恵の世界の一部だ。洋介だって、恵に会っているときは、恵の世界の一部だ。それでいて、前者と後者は交わっていない。
廊下ですれ違ったとき、はじめて互いがあることを認識した。もっと、恵の世界に関わりたい。もっと、恵のことを知りたい。この欲求が強くなればなるほど、胸の中で黒い鉛のようなものが渦を巻く。

一週間と一日。
電話もメールもないまま、会わなかった日々が証明したのは、恵は洋介に興味がないということ。いてもいなくてもいい存在。いてもいなくていい存在が、恵の世界と関わったところで、何の変化もない。洋介だけが関われたことに満足するだけ。
どうやっても、恵と深く関わることができないという喪失感にも似た思いが、身体中に広がっていた。

【さいのめ】　scene8：混迷

賽は投げられた。
目を知るのは神のみぞ。

少しずつ関わっていくことで、関わりが深くなっていく。そう思えばこそ、恵の部屋に通っていた。

通って気付いたのは、関わりはどこまでも一定の位置から変わらず、変えていく方法も見当たらないということ。

後ろ向きな気持ちのまま、洋介はチャイムを押した。

カギをはずす音がする。
ドアが開くと、見知らぬ男が出てきた。
背が高い。洋介は男を見上げた。どこかで見たことのある顔だと思った。

男は目を丸くして、洋介を見下ろしている。

「あんた、誰」

洋介の口をついて出た。

「オレは……もしかして、洋介君？」
「そうだけど」

洋介は睨むように相手を見ていた。恵の部屋から知らない男が出てきたのも、相手が名前を知っているのも気に食わない。

男は洋介が睨んでいるのも気にとめず、笑顔を見せた。

「入って。恵はすぐに帰ってくると思うから」
「いないの？」
「すぐ帰ってくるよ」

洋介は手元のビニール袋に目を落とした。カップアイスがふたつ入っている。恵がいないなら、これを渡して帰ってもいい。

「君が来たら、入ってもらえって恵に言われてるんだよ」

知らない男とふたりで恵を待つのは嫌だった。

男に促されて、洋介は恵の部屋に上がった。
男は背が高い。百八十センチ以上はあるように見える。短くした髪を逆立てていた。

どこかで見たことのある顔だが、思い出せない。恵の父親とも顔が違う。

この男とふたりきりで待つのは落ち着かなかったが、好奇心が勝った。
この男が誰で、恵とどういう関係なのか。
留守を任せているのだから、それなりに親しいのだろう。

「コーヒーでいい？」
うんと答えながら、洋介は冷凍庫を開けた。アイスを仕舞う。
男は迷いもせず戸棚からマグカップを取り出して、コーヒーを入れた。手馴れた感じがする。
洋介はいつもの場所に座った。その向かいに男は座る。男はマグカップを差し出した。恵が使っているのと色違いの青いマグカップだ。
男はコタツに肘をついて、身を乗り出して洋介の顔を見る。近づかれて、洋介は身を引いた。
「一度、会ってみたいと思っていたんだよね」
「は？」
「恵の部屋に来ては怒って帰るってきいてたから」
「そんなこと、話てんの？」
「恵が相手だもん、怒る気持ちもわかるけどね」
そういいながら、男はコーヒーをすすった。
恵と一緒にいない時間、洋介のことを思い出しているのだと思うと、洋介は嬉しかった。どんなことを語っているのか、気になった。
「他には、なんて？」
「毎日、部屋に来るとか、毎日、愛をささやくとか」
そういいながら、男は揶揄するように笑った。
洋介は顔を赤らめて、目を逸らした。とりあえず、カップを口に

運んだ。
くすりと男が笑った。むっとして、洋介は睨みつける。
「何がおかしいんだよ」
「恵が君と一緒にいる理由が、なんとなくわかるよ」
「なんだよ、それ」
「本人にきくといい」
そういって、男は立ち上がった。座った状態で男を見上げると、いっそう大きく感じられる。
男は玄関へ向かった。途中で、チャイムが鳴る。
「おかえり。洋介君が来てるよ」
恵が帰ってきた。
「へんなことしてない？」
「してないよ」
恵が部屋に入ってくる。
「豊にへんなことされなかった？」
「してないってば」
そういって、豊と呼ばれた男は恵の肩にあごを乗せた。
恵の言葉に返事をしようとして、洋介は口を開けたままになった。
二人の顔は並べるとよく似ていた。
豊の顔を見て、どこかで見たことがあると思ったのは、豊の顔に恵を見たからだ。

「もしかして、兄弟？」
「そうだよ。似てない？」
恵はいつもの定位置に座った。豊は台所へ恵のコーヒーを入れに行った。
「すげえ、似ている」
「みんな、そういうんだよね。大きさだけ違うとかって」
「ああ、そうだなあ」
台所から豊が戻ってきた。恵はコーヒーを受け取る。
恵と豊は、顔こそよく似ているが、身長は豊のほうがずっと高いし、肩幅も広い。
豊は洋介の向かいに座った。
「で、洋介君は、何しに来たの？」
「何って……」
これが恵の質問なら、会いに来たと単純に答える。相手が兄弟となると口ごもってしまった。やましいことはないはずなのに、後ろめたい。
それを知っているのか、豊はにやにやと笑って洋介を眺めている。
「そういう意地悪をしないの」
恵が豊を睨む。
「弟の焼きもちだよ。意地悪くらいさせろって」
「焼く必用のないモチだよ」

恵は澄ました顔で、マグカップを口に運んだ。
「そんなこと言ってると、逃げられるぜ」
「逃げたらそれまでだよ」
「あいかわらず、淡白だなぁ」
「豊は質より量だね」
「まだ、遊びたい盛りなんだよ」
ふたりの会話に口が挟めない。洋介は恵が一言、言うたびに尋ねたいことができるのに、口を開くと豊のほうが言葉を発している。
ふたりの間に割って入るタイミングがつかめなかった。

「遊んでいるうちに大事なものを失っても知らないよ」
「恵こそ受け流してばかりいると大事なものを失うぞ」
「嫌なこと言うなぁ」
「心配して嫌なことを言ってくれるのは身内だけだろ」
「豊の場合は心配じゃなくて、面白がってるだけでしょ」
「オレは恵がかわいくて仕方ないんだよ」
「神様に背く気はないよ」
「恵がその気なら踏み外してもいいぞ」
「道を踏み外さなくてよかったね」
「どこの神様だよ」
「仏様がふたりいるじゃん」
「死んだ人間は何も言わないよ」
そういいながら、豊は恵に顔を近づけた。そうだねと、相槌を打ちながら、恵は逃げようとしない。
唇が触れる寸前、洋介が割って入った。豊を顔を押しのける。

「な、何してんだよっ」

「あははははは」と、歯切れよく豊は笑い声を上げた。恵も笑っている。

「何がおかしい！」

「そんなにムキにならなくても……」

言い終えないうちに豊は吹き出した。腹を抱えるようにして笑っている。

洋介の矛先は恵に向いた。

「あんたも、なんで逃げないんだ」

「なんでって言われても」

「兄弟だって、していいことと悪いことがあるだろ」

「ダメだった？」

「ダメに決まってんだろ」

「ダメだってさ」

まるで、自分は無関係というような口調で豊に言った。

豊はまだ笑っている。洋介には何が面白いのかわからない。

「そんなに笑ったら、失礼だよ」

恵がたしなめると、口元を緩めたまま、

「ごめん、ごめん」　と、言ったのも束の間、また吹き出した。

笑うのをこらえようとすると余計におかしくなるものだ。

洋介は憤然として、豊を睨みつけた。

「ホント、ごめん。あんまり素直な反応なんでつい……」

言っている口元が緩んでいる。まだ、笑いたいのをこらえているのだ。

「ねえ、兄弟でキスしちゃダメだってさ」

恵は豊に念を押すように言った。豊は口元をもぞもぞさせて、笑いをこらえている。

「そんなの当たり前だろ」

イライラしながら、洋介は豊を睨み続けていた。

洋介の言葉を確認するように豊に尋ねる。

「そういうもの？」

「さあ、どうだろうね」

と、豊は答える。恵はどうなのとでもいう風に洋介の顔を見る。

「兄弟ではしないだろっ」

洋介の言葉を受けて、恵は豊の顔を見る。豊は首を傾げて、笑っていた。

恵の反応を見て、洋介はようやく気がついた。

「まさか、あんたら、今まで……」

恵は眉宇を寄せて、首を傾げている。洋介の反応を不可解に思っている様子だった。
豊のほうは口元を緩ませながら、洋介の反応を見ている。今にも声を上げて笑い出しそうだった。

「おかしいだろ」
「じゃあ、もうしない」と、恵。

「おかしいのは洋介君のほうかもよ」
「豊よりはフツウだと思う」

豊は意味ありげに洋介を一瞥した。

「オレだけじゃないだろ、キスするのは」
「ああ、そっか」

恵は納得したような顔をして、頷いた。
もちろん、洋介はきき捨てられない。

「ちょっと待て。他にする相手がいんのかよ」

友達、と恵は短く答えた。眉間にシワがよっている。

「は？」
「友達とするよ」
「なんでするんだよっ」
「親愛表現、かなぁ？」
「理由なんてきいてない」
「違うの？」

恵は豊に尋ねる。豊は頬を痙攣させている。笑いたいのをこらえているのだ。

「フツウはしないだろ、友達とか兄弟なんかと」
「それは洋介君のフツウじゃない？」

にやにやしながら、豊が言った。豊のほうはわかっていてやっているらしい。恵のほうはそれが当たり前になっているようだ。

「うちはグローバルだから」
「そんなのグローバルじゃねえ」

こらえきれなくなって、豊は声をあげて笑い出した。
恵は笑っている豊を見て、深く息を吐いた。

「からかうの、よしなよ」
「だって、かわいいじゃないか」
「かわいくねえっ」

豊を洋介が睨みつける。にやけた顔で、豊はコーヒーを口に運んだ。

「豊の悪いクセだよ」と、恵がたしなめた。

「子供の頃からのクセだから、簡単には治らないさ」
「すぐに人のものに手を出すんだから」
「人聞き悪いな。手を出すのは恵のものだけだろ」
「ちょっと、待てっ」

洋介が口を挟んだ。ふたりが同時に視線を向ける。

「今、なんて言った」
「今？」

恵と豊は顔を見合わせる。

「手を出すのは恵のものだけ？」
「オレ、あんたのものなのか？」
「違うの？」

当たり前のように恵はきき返した。

「違うだろ。あ、いや、あってる気もするけど、なんか違くねえ？」

豊に同意を求めるように視線を向けた。豊は頬をヒクヒクさせて、白い前歯を覗かせている。同意は求められそうもないので、洋介は視線を恵に戻した。

「だって、あんたはオレのこと、なんとも思ってないじゃないか」
「洋介君は恵にゾッコンなんだろ？」

他人の口からそんな風に言われると途端に恥ずかしくなる。洋介は顔を赤らめて、豊を睨みつけた。

恵は豊と洋介を交互に見た後、天井を見上げた。考えている。

まずは洋介の言葉を反芻。

洋介は恵のものというのは、違う。違うけど、洋介はあっている気もしている。

なぜそうなのかという明確な言葉はなかった。何かが違うのだと言う。それはきっと感覚的なものなのだ。
感覚的なものだから、洋介は表現できない。
恵もわからない。
互いの感覚に差がある。
この差がいつも洋介を苛立たせているような気がする。玄関を開けると、いつでも不安そうな顔をしているし、部屋に入れば、落ち着かない挙動をとる。
イライラするのが嫌なら部屋に来なくなるだろうから、嫌ではないらしい。好きで来ているのに、むくれるか、拗ねるかして帰っていく。
いや、好きだからこそむくれたり拗ねたりしているのだろう。
そうなるとわかっていても、洋介は恵に会いに来る。
恵が拒絶するか、洋介が諦めるかすれば、洋介は来なくなる。
来ている間は、むくれようと拗ねようと、諦めるきっかけを与えない限り、恵が何をしても洋介は受け入れるしかないのだ。受け入れられなければ、来なければいい。
そこまで考えて、恵は豊に眼を向けた。豊は微笑を浮かべて、恵の考えていたことを見透かすように言った。
「やっぱり、恵のものだったか？」

「うーん、そう思うんだけど」

違うっていうしと、語尾を濁して、洋介を一瞥した。

「違うだろ」

と、洋介が言うと、困ったような顔をして、恵は豊に助けを求めるような眼を向けた。

「ものっていう言い方が嫌なんじゃないか」
「ああ、そういう……」
「それも違うだろ」

洋介はすぐに反応した。
豊はにやにやしながら、洋介に眼を向けたまま、恵に言う。
「恵が洋介君のものじゃないっていうのが嫌なのかもよ？」
「そうなの？」

恵も洋介に眼を向ける。

「ちがっ……いや、そりゃ、あんたがオレのものならって思わないわけじゃないけど」

あんたはオレのことなんとも思ってないじゃないかと、洋介はつぶやくように言ってうつむいた。

頭でわかっていても、改めて言葉にすると気が落ち込んだ。
その様子を眺めながら、豊はにやけた顔でコーヒーをすすっている。

「なんとも思ってないことはないよ」
　恵の言葉に洋介は顔を上げた。
「だって、洋介はいつもアイスくれるし、ＤＶＤ借りてきてくれたりするでしょ」
「犬がエサを貰って喜んでいるだけだろ」
　いつか、恵が言った言葉を投げるように返した。恵の代わりに豊が答えた。
「洋介君、エサをあげているのは君だけなんだよ」
「は？」
「恵が身内以外でエサを貰っているのは君だけだって言ってるの」
　にやけていた豊は、いつの間にかまじめな顔をしている。恵は困惑気味に豊と洋介の顔を交互に見ていた。
「だから、オレは君に会いたかったんだよ」
「え……？」
　洋介が意味を考える間もなく、豊はそろそろ帰るよと言って立ち上がった。
「今日、泊まらないの？」
「たまには洋介君を泊めてあげれば？」
「なんで？」ときき返しながら、恵も立ち上がった。
「情に絆されるのも悪くないと思うよ」

「ヤダよ、そんなの」
「洋介君が相手ならオレはいいと思うよ？」
「それなら、豊が相手になればいいでしょ」
「オレじゃぁ、洋介君が嫌だろ？」

そう言って、洋介に眼を向ける。洋介は立ち上がろうと腰を浮かせたところだった。急に矛先を向けられて、そのままの姿勢で止まった。

「嫌じゃなければ、オレが相手するけど？」

豊の表情から、またからかわれているんだなと洋介は思った。

「嫌に決まってる」
「豊はいいやつだよ」

フォローするように恵が言うので、洋介は恨めしそうに豊を見た。豊は恵がそう言うだろうということはわかっているのだ。恵を使って、洋介をからかっている。

洋介と恵は玄関で豊を見送った。

またねといって、豊が恵の額にキスをしたとき、洋介はふたりの間に入って、豊を押しのけた。
豊は声を上げて笑いながら、恵の部屋を出て行った。

玄関が閉まると、急に疲れがやってきた。
恵をふたり相手にしたような気がする。
混乱し続けると疲れるのだ。

洋介は踵を返して、コタツへ戻ろうとした。後ろに引っ張られるような感覚があって、足を止めて振り返った。

恵が袖を掴んでいる。

「な、何？」
「アイスは？」
「冷凍庫に入ってる」
「ありがとう」

恵は目を細くして、嬉しそうに笑った。その顔を見ただけで、ランプに火が灯ったように、胸が温かく明るくなる。

やっぱり、恵のものかもしれないと、洋介は思った。

洋介の混迷は続く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4639g/

不実の木

2010年10月9日23時00分発行